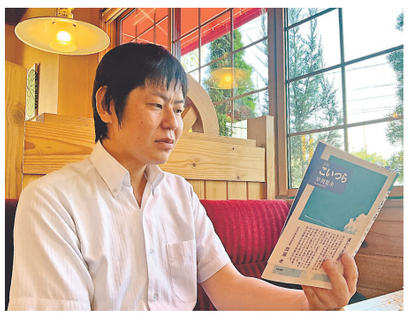
虹（にじ）「こいつら」との日々を

⑱⑤ 短歌と歩む教師人生


『こいつら』を手にする早川さん

野球観戦は好きだが、巨人は苦手だった。富山市の早川晃央（はやかわあきお）さん（34）は学生時代を東京で過ごしながら、巨人が拠点とする東京ドームには行かなかった。「反骨精神というと大げさですかね。でも、巨人みたいにメジャーなものってどうも嫌いなんです」

視線はマイノリティーや弱者に向く。社会科教師として勤める中学校の授業でも、性的少数者や原発、沖縄の基地問題などを取り上げて生徒たちに議論させる。凝り固まった常識とは別の視点を持ってもらいたいという思いからだ。

歌人としての顔もある。平易な言葉で目の前にあるものをただ描写する「ただごと歌（うた）」の流れに立つ。技巧には走らない。たとえば、こんな歌を詠む。

雨粒は海に落ちればそのときを境にすべて海水となる

雲から降り注ぐ水が海に落ちれば海水と一体化する。当然と言えば当然だが、世界の不思議を大真面目に言語化したようにも見える。

「ただごと歌は究極の写実。技巧を凝らすのが当たり前の歌人の中ではマイノリティーだと思います。そういう意味では自分の性分と近い。ただ、僕がこうとしか詠めないというのもある」と笑う。

早川さんはこの夏、第１歌集『こいつら』を刊行した。歌を始めた中学３年生から現在に至るまでの集大成だ。１人の歌人の10代から30代までの作品を収めた歌集は珍しい。作家性が定まってから歌をまとめることが一般的だからだ。「僕の歌集は黒歴史みたいなところもある。良く言えば日記のようなもの。思い出すこともたくさんある」

自分の目には拙く映る作品を載せないという決断もできた。しかし、学校の生徒たちの姿とも重なった。冒頭を飾る一連に収めたのは、中学生の時に詠んだみずみずしく真っすぐな歌だ。

真っ白な立山見える教室をきょう巣立ちゆく、輝けぼくら

◇

祖母も父も短歌結社「コスモス短歌会」の会員だった。早川さんも誘われて結社に入った。毎月送られてくる結社誌に自分の歌が載るのがうれしかった。

若者が珍しかったのだろう。高校に入ると、奥村晃作（おくむらこうさく）さん（88）というカリスマ的な歌人からメール歌会に誘われた。現代短歌の一つのジャンルとして「ただごと歌」を確立した人物だった。

＜次々に走り過ぎゆく自動車の運転する人みな前を向く＞。奥村さんの代表作だ。当たり前すぎるからこそ、誰も気が付いていなかった認識を短歌の韻律に託している。早川さんは歌集で目にした瞬間にしびれた。「こんな視点があるのか」と世界が変わって見えた。こんな歌を詠みたいと思った。

高校では文芸部に所属した。先輩は皆小説や詩を書いていたが、早川さんはやはり短歌だ。学年が上がるにつれ、新入生にも手ほどきした。実質的に「短歌部」になった。

2008年、３年生の夏。高校生の短歌日本一を決める「全国高校生短歌大会（短歌甲子園）」の団体戦に出場した。決勝で出された題は「嘘（うそ）」だった。食品偽装問題が話題になった世相を反映したものだった。早川さんはこんな歌を詠んだ。

富山にて売らるる岐阜産「ふるさと牛乳」なんてひどいじゃないか

素朴な疑問を「句またがり」で勢いよく表現した。結果、全国の頂点に立った。

大会後、明治大学への推薦入学が決まった。一般入試を控えた同級生を気遣う担任の教諭からは「合格したと言うな」と言われた。喜びは静かに歌の中に閉じ込めた。

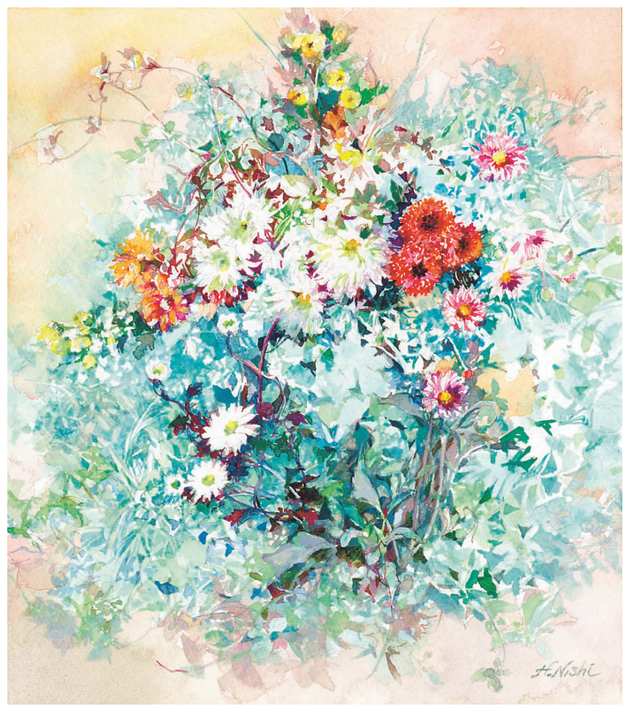
明大を私が欲し明大が私を欲したゆえの合格

◇

上京して初めての歌会で奥村さん本人と会った。「君が早川君か」と握手を求められた。ガッチリとした手だった。歌に触れた時から憧れの存在だ。ユーモアがにじむ歌柄とは逆に、本人はいたって真面目な性格だった。「歌は五七五七七の定型が大切だ」と基本に忠実だった。奥村さんはその後も早川さんを歌会や読書会に誘い、「君はそのままでいい。頑張るんだぞ」と励ましてくれた。若者から学ぼうとする謙虚な姿勢もあり、人生のお手本になった。

大学ではテレビでもおなじみの教育学者、齋藤孝（さいとうたかし）さんのゼミに入った。齋藤さんのゼミには教師になった卒業生がよく顔を出した。皆一様に仕事の魅力ややりがいをきらきらと語った。「こんな新しい授業をやった」「子どもたちが成長した」。充実感をにじませる姿に早川さんも背中を押された。

大学卒業に合わせて、歌集を作ろうと思った。中学から８年間短歌を続けたから、作品数はそれなりにある。奥村さんの指導を仰ぎ、編集を始めた。しかし、短歌仲間から止められた。「受賞経験もないのに、まだ早い」ということらしい。「そういうものか」と一度諦めた。もやっとした気持ちを抱えつつ、教員になった。


「野菊」西治子

◇

射水市内の中学校を振り出しに教師生活は始まった。ルールも知らないのに剣道部の顧問になった。授業の準備、学習指導、クラスの運営、保護者対応などの業務が一気に押し寄せた。家庭の事情や日本語の習熟度によっては難しい対応も必要になる。夜遅くまで仕事する日々を送った。大学の先輩からは教師の魅力ばかりを聞かされていたが、現場に出て初めて知る苦労は多かった。以前より歌に割ける時間は減った。それでもスマートフォンにひらめいた歌を書き留めた。生まれたのは、職場詠だ。

中三の男子言い争ったあと「ごめん」の「ん」はかすかなる音

コロナ禍をめぐる喧騒が落ち着いた昨年、ひさびさ東京での歌会に参加した。打ち上げの席では奥村さんの正面に座らされた。「そろそろどうだ」と言われた。歌集を出せという意味だ。目をかけてくれた奥村さんに報いたい気持ちはあった。短歌をずっと続けてきたのは奥村さんの存在が大きい。「この機会を逃せば歌集なんて出さないだろう」と思った。

腹を決めた。歌集を作る。これまで詠んだ歌から約1000首を奥村さんに預け、そこから365首を選んでもらった。中学校、高校、大学、就職以降という編年体の構成も提案してくれた。奥村さんは「早川君という存在は珍しい。彼は教師であり、歌人。仕事も短歌も好き。普通はどちらかにのめり込むけど、彼は滞りなく両方ちゃんとやる。僕のただごと歌の系譜にあり、世に出したかった」と言う。

歌集を編みながら、早川さんは歌に支えられてきた人生を思った。職場では、生徒、保護者、教員相手にそれぞれ顔を使い分ける。どれも自分だが、それぞれの喜びも困難も懐深く受け止めてくれたのが短歌だった。歌の中の若かりし自分と、今の生徒もつながって見える。歌があるから教師をやってこれたし、教師であるからできた歌もある。だから最後はこの一首で締めた。

「こいつら」と思う日々でも「こいつら」が愛おしくなる桜の季節

担任を受け持ったクラスの生徒の顔を思い浮かべて詠んだ歌だ。タイトルの『こいつら』はこの歌から取った。奥村さんに相談すると、「これしかない」と太鼓判を押された。

最近、かつての教え子と食事した。歌集を読んでくれた。「均一化の世界に疑問符を打つような歌」と大人びた感想をくれた。自分の手を離れた後も成長した様子に目を見張った。教師の面白さを改めて知った。学校では「こいつら」の後輩たちと向き合う。多分、そこで生まれた情景がまた歌になる。

＜明大を私が欲し明大が私を欲したゆえの合格＞。この早川さんの歌を目にした時、10代らしい生意気さと大胆さ、そして喜びを感じました。心情と事実を率直に表現する鮮やかな手つきに驚きました。こんなユニークな視点を持つ早川さんが教師となり、さまざまな世界に生徒を送り出しています。「こいつら」の未来が楽しみです。

「虹」第８巻 販売中

最新刊の第８巻「虹　誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141～160回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076（445）3352（平日午前９時～午後５時）。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933―0911　高岡市あわら町13―50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX　0766－25－7773
mail　niji@kitanippon.jp

次回掲載は10月１日（火）です。

紙面提供／人と鉄のあいだに
OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局